

ヨーロッパポルトガル語 Wh 移動と Topicalization について

El movimiento-Cu y la topicalización en portugués europeo *)

石岡 精三

Seizo ISHIOKA

0. はじめに

Wh 要素と定動詞の間に主語要素が介在する (1a) は不適格である。D(iscourse)-Linked Wh 要素 (*que manuscrito*) が関与する (1c) は適格と判断される。(1d) の非文性は、D-Linked Wh 要素と定動詞の間に主語以外の接語左方転位 (Clitic Left Dislocation : CLLD) 要素が生起しないことを示す。(1e) は、一定の条件下で Topicalization の適用を受けた要素 (TOP 要素) が D-Linked Wh 要素と定動詞の間に生起不可能な話者グループの存在を物語る ((2b) も同様のことを示す)。(3a) は、CLLD の適用を受けた心理動詞の経験者要素 (Experiencer) が D-Linked Wh 要素と定動詞の間に生起することを示す。 ¹⁾

(1) a.*Que o Pedro comprou? (Ambar 2008: 2a)

b. Que comprou o Pedro? (Ambar 2008: 2b) ‘What did Peter buy?’

c. Que manuscrito a Maria está a pensar enviar a essa editora? (Barbosa 2006a: 73a)

‘Which manuscript is Mary thinking of sending to that publisher?’

d.[*/*] Que manuscrito, [a essa editora]_i, estás a pensar enviar-lhe? [CLLD] (ibid.: 73b)

e.[^{OK}/*] Que manuscrito, a essa editora, estás a pensar enviar? [Topicalization] (ibid.: 73c)

‘Which manuscript are you thinking of sending to that publisher?’

(2) a.[*/*] Não sei [a que pessoa, [esse livro]_i, o João o] ofereceu no Natal? (Duarte 1996: 48a)

b.[^{OK}/*] Não sei [a que pessoa, esse livro, o João ofereceu no Natal?] (ibid.: 47a)

‘I don't know to which person John has sent that book on Christmas?’

(3) a. Que discos, [ao João]_i, mais lhe agradará receber? (Barbosa 2006a: (13a))

b. Que discos, ao João, mais agradará receber? (ibid.: 13b) ‘Which disks will it give more pleasure to John to receive?’

Ambar (2003, 2008) に基づく本稿において、上で確認された事象を説明する論法を提示する。Wh 要素と当該 Wh 要素がその Spec に生起するゼロ範疇との隣接条件 (Adjacency) と CLLD の適用条件等を想定する。本稿は以下のように構成される。第 1 節では、Ambar (2003, 2008) の概略とその問題点を示す。第 2 節では、本稿の仮説体系が (1) から (3) だけでなく、他の用例における判断上の異同をも説明することを示す。(1e) の相違は、移動要素の始発点と移動経路に関する仮説によって説明される。第 3 節では、本稿の仮説体系がイタリア語の Contrastive Focus (CF) 構文にも適用される。

1. Ambar (2003, 2008) の概要とその問題点

Ambar の論法は (4) のように要約される。(4a) の節構造において、主語等の CLLD 要素が Spec(X) に生起する。WhP に付与される ϕ 素性と Tense 素性は照合される。Non-D-Linked Wh 要素の照合形

式である (4c) では, Wh 要素と定動詞は, それぞれ Spec(Wh) とゼロ範疇 (Wh) の位置に生起する (5b)。非文の (1a) に対応する構造 (5a) では定動詞 (*comprou*) がゼロ範疇 (Wh) へ移動していないため, WhP の Tense 素性が照合されない。D-Linked Wh 要素が生起する (1c) に対応する構造 (5c) では, 活性化された AssertiveP が WhP の Tense 素性を照合するため, 定動詞がゼロ範疇 (Wh) へ移動する必要はない (定動詞は I 位置にある)。これにより, ϕ 素性と Tense 素性の双方が適格に照合される。

(4) a. [AssertiveP [XP [WhP [FocusP [XP [IP . . .]]]]]] 2)

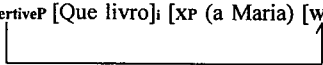
b. WhP は ϕ 素性と Tense 素性を付与される。

c. Non-D-Linked Wh 要素が Spec(Wh) へ移動することによって発動する WhP の ϕ 素性照合は, 定動詞がゼロ範疇 (Wh) へ移動することによって発動する WhP の Tense 素性照合を前提とする。

d. D-Linked Wh 要素が WhP の ϕ 素性照合のために Spec(Wh) への移動した後にさらにその Spec 位置へ移動することにより活性化された AssertiveP は, WhP の Tense 素性を照合する。

(5) a. * [WhP: $\langle \phi, T \rangle$ que [FocusP [XP (o Pedro) [IP (o Pedro) comprou ...]]]] (1a)

b. [WhP: $\langle \phi, T \rangle$ que comprou [FocusP [XP (o Pedro) [IP (o Pedro) ...]]]] (1b)

c. [AssertiveP [Que livro]_i [XP (a Maria) [WhP: $\langle \phi, T \rangle$ ti [FocusP ti [IP (a Maria) está enviar ti...]]]]] (1c)


(6) と (7) で観察されるように, Root Context と異なり, 間接疑問文における [que ('what') 以外の Wh 要素+主語+定動詞] の語順が許容される。Matrix V は間接疑問節を構成する AssertiveP を活性化する。この活性化された AssertiveP が WhP の Tense 素性を照合するため, 定動詞は I 位置にとどまる。

(6) (Ambar & Veloso 2001: 5a; 5b; 6c; 6d)

a. *O que o Pedro comprou?

b. O que comprou o Pedro? 'What did Peter buy?'

c. Não sei o que o Pedro comprou.

d. Não sei o que comprou o Pedro. 'I don't know what Peter bought.'

(7) (Ambar & Veloso 2001: 1a; 3a; 6a; 6b)

a. *Que o Pedro comprou?

b. Que comprou o Pedro? 'What did Peter buy?'

c. *Não sei que o Pedro comprou.

d. Não sei que comprou o Pedro. 'I don't know what Peter bought.'

(6c) の構造として (8a) が想定される (Ambar (2003: 79) では, *o Pedro* の代わりに *o João* が用いられる)。Wh 要素 (*o que*) が Spec(Wh) へ移動するため, WhP の ϕ 素性が照合される。活性化された AssertiveP が WhP の Tense 素性を照合する (構造 (8a) が適格と予測される)。

(8) a. Não sei [AssertiveP [XP [WhP o que_i [FocusP ti [XP [IP o Pedro comprou ti]]]]]] (Ambar 2003: 79)

b. *Não sei [AssertiveP [XP [WhP que_i [FocusP ti [XP [IP o Pedro comprou ti]]]]]]

c. Não sei [AssertiveP [XP [WhP que_i [Wh' comprou [FocusP ti [XP [IP o Pedro ti]]]]]]] (ibid.: 80)

(7c) に対応する構造 (8b) は, 不適格と予測されることになる。これは, Wh 要素 (*que*) が WhP の ϕ 素性を照合するためには定動詞がゼロ範疇 (Wh) への移動する必要があると前提されるためである。

(8b)において定動詞がI位置にとどまるため、WhPの φ 素性は照合されない(この派生は不適格と予測される)。適格と判断される(7d)に対応する構造(8c)においては、定動詞はゼロ範疇(Wh)まで移動する。これにより、WhPのTense素性と φ 素性の双方が照合される(当該用例が適格と予測される)。Ambar(2003: p.235)とAmbar & Veloso(2001: p.22)は、主語倒置が適用された(6d)のような用例を定動詞のFocus位置への移動によると想定する。3)

しかしながら、このAmbarの論法には問題がある。D-Linked Wh要素と定動詞の間に主語CLLD要素が生起する(1c)と間接目的語(IO)CLLD要素が生起する(1d)との相違が説明されない。Topicalizationプロセスについての言及が見られないため、TopicalizationとWh要素移動が適用された用例である(1e)と(2b)の構造が不明である。また、当該用例で観察される話者グループごとの異動が説明されない。(9)で観察される主語CLLD要素と直接目的語(DO)CLLD要素との語順に関する相違が説明されない。Barbosa(2006b)は(9a)と(9b)の双方を適格と判断する。Costa(2001)では、主語CLLD要素と定動詞が隣接する(9a)が適格と判断される。

- (9) a. ^[OK/OK][Esse bolo]_i, o Paulo comeu-o (Barbosa 2006b: p.362/Costa 2001: 4a)
 b. ^[OK/*]O Paulo [esse bolo]_i comeu-o (Barbosa 2006b: p.362/Costa 2001: 4b) 'Paul ate that cake'
 c. *Não sei ainda [CP [a quem]_i [FP [este livro]_i [FP [IP pro o vou oferecer cv t_j]]]] (Barbosa 2006a: 69)
 Agree → *
 d. Não sei ainda [CP a quem [FP [este livro]_i [FP Op [IP pro vou oferecer t_i]]]] (Barbosa 2006a: 66)
 Agree → ok
 'I don't know yet to whom I'm going to give this book'

Barbosa(2006a)は、(2a, b)に並行する(9c, d)の相違を最小原理(minimalidade)によって説明する。TOP要素とCLLD要素は共に機能範疇(FP)に左方付加した位置に生起する。Topicalizationでは、空の演算子(Op)がSpec(F)へ移動する。CLLDでは、CLLD要素に対応する空範疇(cv)がin-situ位置に生成される(対応する再述接語を随伴する)。TOP要素とOp要素の間、そしてCLLD要素とcvの間で、Chomsky(2001)のAgreeの関係が成立する必要がある。(9c)におけるproの介在は、CLLD要素(este livro)とcvとの間のAgree関係の構築を阻止する。(9d)のTOP要素(este livro)とOpとの間にAgreeの関係が成り立つ。βグループの(9d)は下接の条件(Subjacency Condition)によって排除される。これは、Wh要素(a quem)が複数の境界接点(IP, FP)を超えて移動するためである(Wh要素はその下位Spec位置に要素が生起する範疇に一時停止できないと想定されている)。αグループでは下接の条件の効果が弱い、あるいは殆どゼロ(ténue, ou quase nulo)と想定されるため、(9d)は適格と判断される(p.200)。この下接の条件は、後述するαグループの用例としての(17a, b)を共に適格と予測する。しかしながら、(17b)は不適格と判断される(問題点)。Barbosa(2006a)は、主語倒置を必要としないD-Linked Wh要素が生起する(1c)と(2)のような間接疑問文を説明する論法を提示するものであり、この主語倒置の適用が随意的となるプロセス自体については言及していない。本稿では、この主語倒置プロセスを勘案した上で、(1)から(3)の用例に対する総合的な論法が提示される。

2. 提案とその適用例

(10) a. CP: ...[AssertiveP [TopicFocusP [WhP [PhiP [TP ...]]]]] 4)

- b. TopicFocusP を選択する Assertive 投射の生成, あるいは Topicalization が適用される場合, TopicFocus の投射が生成される。TOP 要素は TopicFocus の上位 Spec へ移動する。
- c. 主語を含む CLLD 要素は, その主要部に定動詞が生起する Wh あるいは Phi のいずれかの範疇の上位 Spec 位置あるいは下位 Spec 位置に生成される (集中 CLLD)。
- d. TopicFocus の投射が生成される派生において唯一許容される CLLD は, 最上位に生成される項要素 (主語要素と心理動詞の経験者要素) が下位 Spec(TopicFocus) 位置に生成される CLLD と, 一般の要素が Spec(Assertive) に生成される CLLD である (唯一の分散 CLLD)。
- e. Wh 要素は関係するゼロ範疇 (Assertive あるいは Wh) と隣接する。主語 CLLD 要素とゼロ範疇 (Phi) との隣接を要求する話者グループの存在が確認される。

上の仮説 (10) を想定する。TOP 要素は TopicFocus の上位 Spec 位置へ移動する。TopicFocusP を選択する Assertive の投射を生成することになる D-Linked Wh 要素は, Spec(Assertive) へ移動する。主語を含む CLLD 要素は定動詞が位置するゼロ範疇 (Wh) と Phi のいずれか 1 つの範疇の上位, あるいは下位 Spec に生成される。TopicFocus の投射が生成される派生において, その下位にあるゼロ範疇の Wh と Phi での CLLD の適用が停止し, TopicFocus の下位 Spec での主語と心理動詞の経験者に対する CLLD と, Assertive の Spec での一般の要素に対する CLLD のみが適用可能となる。Wh 要素とその Spec に Wh 要素が移動するゼロ範疇 (Assertive, Wh) は隣接する必要がある。

複数の要素に CLLD が適用された (9a, b) を検討する。Costa (2001) では, 主語 CLLD 要素と定動詞が隣接する必要がある。Barbosa (2006b) では, この隣接性が要求されない。この相違は, (10e) の主語 CLLD 要素とゼロ範疇 (Phi) との隣接要件によって説明される。Costa (2001) では, ゼロ範疇 (Phi) との隣接が要求されるため, (9b) に対応する構造 (11b) は排除されることになる。Barbosa (2006b) ではこの隣接性が要求されないため, (9b) とその構造 (11b) は適格と予測されることになる。

(11) a. [^{OK/OK}][PhiP [Esse bolo]_i, [PhiP o Paulo comeu-o]_i]

b. [^{OK/*}] [PhiP O Paulo, [PhiP [esse bolo]_i comeu-o]_i]

次に, (1a, b) の構造 (12a, b), (2a) ((12c) として再掲) と (12d, e) について考える。

(12) a. * [WhP Que_i [WhP o Pedro [Wh' comprou [PhiP [TP ti]]]]]? (1a) (← Wh 要素とゼロ範疇 (Wh) との隣接性)

b. [WhP Que_i [Wh' comprou [PhiP o Pedro [TP ti]]]]? (1b)

c. *Não sei [AssertiveP [a que pessoa]_i, [TopicFocusP [esse livro]_i, o João [WhP ti [PhiP o ofereceu no Natal?]]]] (2a)

d. [WhP [Este livro]_i; [WhP quem_j [Wh' o quer ler [PhiP [TP ti]]]]? (Barbosa 2006a: 23a)

e. *Quem este livro quer ler (ibid.: p.187) 'Who wants to read this book?'

(1a) の構造 (12a) において, Wh 要素 (quem) と定動詞 (comprou) は, それぞれ Spec(Wh) とゼロ範疇

(Wh)にある。これにより、WhPの ϕ 素性とTense素性は照合される。(10c)により、(12a)における主語要素(*o Pedro*)はゼロ範疇(Wh)の下位Specに生成される。Wh要素(*quem*)はゼロ範疇(Wh)の上位Specへ移動する。この構造は、Wh要素とゼロ範疇(Wh)との隣接要件である(10e)によって排除される。主語倒置が適用された構造(12b)では、隣接要件に関する違反が観察されない(この用例は適格と予測される)。(12c)において、DO CLLD要素(*esse livro*)はTopicFocusのSpec位置に生成されない(10d)(当該用例は不適格と予測されることになる)。CLLD要素がゼロ範疇(Wh)の上位Specに生成され同時にWh要素がゼロ範疇(Wh)の下位Specに生成される派生は適格と予測される。この予測は(12d)と(12e)によって例証される。

D-Linked Wh要素とCLLD要素が共起する用例(1c-d)と(3a)について考える。(13a)と(13b)は、それぞれ(1c)と(3a)に対応する構造である。非文である(1d)に対応する構造は(13c)によって示される。D-Linked Wh要素(*que manuscrito, que discos*)はSpec(Wh)を経由し、Spec(Assertive)へ移動する。これにより、WhPの ϕ 素性が照合される。D-Linked Wh要素がそのSpec位置へ移動することにより活性化されたAssertivePがWhPのTense素性を照合する(定動詞はPhi位置にとどまる)。

- (13) a. [AssertiveP [Que manuscrito]_i], [TopicFocusP a Maria [WhP ti [PhiP estás a pensar enviar ti a essa editora... (1c)
 b. [AssertiveP [Que discos]_i], [TopicFocusP ao João]_j], [WhP ti [PhiP lhe_j agradecerá receber [TP ti_i]]] ? (3a)
 c.*[AssertiveP [Que manuscrito]_i], [AssertiveP [a essa editora]_j], [TopicFocusP [WhP ti [PhiP estás a pensar enviar-lhe_j... (1d)
 d. [AssertiveP [A essa editora]_i], [AssertiveP [que manuscrito]_j], [TopicFocusP [WhP ti [PhiP estás a pensar enviar-lhe_j...]

主語CLLD要素と心理動詞の経験者CLLD要素のみが、Assertiveが選択するTopicFocusの下位Spec位置に生成される(10d)。これにより、(13a-b)の構造が適格と予測される。(13c)は、Wh要素とAssertiveとの隣接を要求する(10e)によって排除される。CLLD要素(*a essa editora*)が上位Spec(Assertive)に生成される(13d)が適格と予測されることになる。Affective Element(*só esses CDs 'only those CDs'*)がD-Linked Wh要素と同様にSpec(Assertive)へ移動すると想定すると、この予測は以下の(14)によって例証されることになる(主語CLLD要素(*a Maria*)はTopicFocusの下位Spec位置に生成される)。

(14) (Kato & Raposo (1996): 7a-b) ⁵⁾

- a. [AssertiveP [Ao Luis]_i], [AssertiveP só esses CDs [TopicFocusP [PhiP lhe_i recomendou a Maria...
 b. [AssertiveP [Ao Luis]_i], [AssertiveP só esses CDs [TopicFocusP a Maria [PhiP lhe_i recomendou...]

'Mary recommended only those CDs to Luis'

TOP要素が関与する派生について考える。(15a)のTOP要素(*este livro*)はTopicFocusの上位Specへ移動する。Wh要素はSpec(Wh)へ移動する。定動詞はゼロ範疇(Wh)に生成される。つまり、WhPの ϕ 素性とTense素性の双方が適格に照合される((15a)は適格と予測される)。(15b)は生成不能となり、不適格と予測される(Non-D-Linked Wh要素が生起する(15a-b)においてAssertiveの投射が生成されない点に留意されたい)。

(15) a. [TopicFocusP [Este livro] [WhP quem_j [Wh' quer ler [PhiP [TP t_j]]]]? (Barbosa 2006a: 23b)

b. *Quem este livro quer ler? (ibid.: p.187) 'Who wants to read this book?'

c. [AssertiveP [Que discos]_i, [TopicFocusP ao João, [WhP t_i [PhiP mais agrada receber t_i]]]? (3b)

d. Não sei... [AssertiveP a quem, [TopicFocusP esse quadro, [TopicFocusP a Maria... [PhiP comprou... (Duarte 1987: 19a)
'I do not know for whom Mary bought that picture.'

e. [TopicFocusP Ao Pedro, [TopicFocusP esse barco, [TopicFocusP os pais [PhiP [TP não ofereceram... (ibid.: 3b)
'The parents did not offer that boat to Peter.'

心理動詞が生起する (15c) では、Wh 要素 (*que discos*) は Spec(Wh) を経由して、Spec(Assertive) へ移動する。活性化された AssertiveP は WhP の Tense 素性を照合するため、定動詞は Phi 位置にとどまる (WhP の φ 素性と Tense 素性は照合される)。TOP 要素は TopicFocus の上位 Spec へ移動する。つまり、(15c) は適格と予測されることになる。(15d) のような間接疑問文では、*que* 以外の Wh 要素が Spec(Assertive) へ移動する。Wh 要素 (*a quem*) は Spec(Wh) を経由して、Spec(Assertive) へ移動する (WhP の φ 素性が照合される)。活性化された AssertiveP は WhP の Tense 素性を照合する。TOP 要素 (*esse quadro*) は TopicFocus の上位 Spec 位置へ移動する。主語 CLLD 要素 (*a Maria*) は TopicFocus の下位 Spec 位置に生成される。これにより、(15d) は適格と予測されることになる。(15e) では、主語 CLLD 要素 (*os pais*) は TopicFocus の下位 Spec 位置に生成され、複数の TOP 要素 (*ao Pedro, esse barco*) が TopicFocus の上位 Spec 位置へ移動する。(15e) もまた、適格と予測されることになる。

本稿の論法は、(1e) と (2b) に対応する構造 (16a, b) と (16c) の用例を適格と予測する。例えば (16a) において、Wh 要素 (*que manuscrito*) は Spec(Wh) を経由して、Spec(Assertive) へ移動する (WhP の φ 素性と Tense 素性は照合される)。TOP 要素 (*a essa editora*) は Spec(TopicFocus) へ移動する。つまり、(16a) は適格と予測される。しかしながら、(16a) と (16b) の構造を不適格と判断する話者グループが存在する。

(16) a. [^{OK/*}] [AssertiveP [Que manuscrito]_i, [TopicFocusP [a essa editora]_i, [WhP t_i [PhiP estás a pensar enviar t_i]]]]? (1e)

b. [^{OK/*}] Não sei [AssertiveP [a que pessoa]_i, [TopicFocusP [esse livro]_i, [TopicFocusP o João [WhPt [PhiP ofereceu t_i t_j no Natal]]]]. (2b)

c. Perguntei [AssertiveP [que livro]_i, [TopicFocusP [à Maria]_i [TopicFocusP eles [WhP t_i [PhiP deram t_i t_j no Natal]]]].

(Barbosa 2006a: 5a) 'I asked which book they gave to Mary on Christmas?'

同じ論法は、以下の用例 (17) のすべてを適格と予測する。しかしながら、αグループの用例としての (17b, d) は不適格と判断される。βグループの用例としての (17a-d) は不適格と判断される。

(17) (Duarte 1987: 19a; 19b; Duarte 1989: 49a; 50a)

a. [^{OK/*}] Não sei a quem, esse quadro, a Maria comprou. 'I don't know for whom Mary bought that picture.'

b. [^{*/*}] Não sei quem, esse quadro, comprou à Maria. 'I don't know who bought that picture for Mary.'

c. [^{(?)/*}] Conheço uma pessoa a quem, perfumes, tu nunca ofereceste. 'I know a person to whom you never gave perfumes.'

d.[*/] Conheço uma pessoa **que**, perfumes, nunca lhe ofereceu. 'I know a person who never gave perfumes to him.'

(16a, c) を適格と判断し、一方で (17b, d) を不適格と判断する α グループでは、付加語 Wh 要素 (*onde*, *quando* 等) が生起する用例 (18) のすべてが適格と判断される。

(18) (Barbosa p.c. (September 2, 2011))

a. Sabes **onde**, uma carteira igual a esta, poderei encontrar por estas bandas?

'Do you know where I will be able to find a purse like this around here?'

b. Sabes **quando**, ao João, eles ofereceram essa prenda? 'Do you know when they will give that present to John?'

c. Sabes **por que razão**, ao João, eles recusaram a bolsa? 'Do you know why they will not award a scholarship to John?'

上で確認された異同は、TOP 要素同士、あるいは D-Linked Wh として振る舞う要素と TOP 要素の移動経路関係と項 Wh 要素 (主語, DO と IO) の始発点の同定に関する仮説 (19) によって説明されるであろう。 α グループでは、主語 Wh 要素の始発点としてその生成位置が指定される。 β グループでは、加えて DO Wh と間接目的語 (IO) Wh 要素の生成位置もその始発点に指定される。

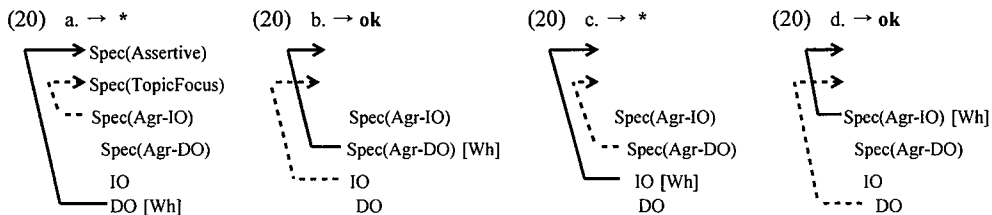
(19) a. TOP 要素同士の移動経路、あるいは D-Linked Wh として振る舞う要素の移動経路と TOP 要素の移動経路は部分的重複関係にある。

b. 顕在的な主語要素、DO 要素あるいは IO 要素が関与する派生において、これらのそれぞれに対応する Spec(T), Spec(Agr-DO) と Spec(Agr-IO) の中の 1 つだけが始発点に指定される。

c. α グループにおいて、主語 Wh 要素の始発点として、その生成位置が指定される。

d. β グループにおいて、主語 Wh 要素、DO Wh 要素、そして IO Wh 要素の始発点として、その生成位置が指定される。

最初に、DO 要素と IO 要素が共起する (16a, b) に検討を加える。IO 要素が DO 要素よりも上位に生成されると想定する (IO 要素の始発点が DO 要素のそれよりも上位にある) (DO 要素が IO 要素よりも上位に生成されると想定した場合でも、同様の効果が期待される)。Spec(Agr-DO) と Spec(Agr-IO) の一方のみが始発点と指定される (19b)。移動形式として、以下の (20a-d) が想定されることになる。



α グループでは、項 Wh 要素の中でその生成位置が始発点と指定されるのは主語 Wh 要素のみであるため、Spec(Agr-DO) あるいは Spec(Agr-IO) が始発点と指定される (19b, c)。(20b) と (20d) の移動様式が許容される (当該用例は適格と予測される)。 β グループでは、主語 Wh 要素だけでなく、DO Wh と IO Wh 要素の生成位置が始発点を構成する。つまり、(20b) と (20d) の移動様式が排除され、不適

格と判断される (20a) と (20c) の移動様式が適用されることになる (β グループの (16a-b) は不適格と予測されることになる)。(19) の仮説は、DO TOP 要素と IO TOP 要素の相対語順が問われないことを予測する。これは、(21) によって例証される ((21a, b) は、それぞれ (20d, b) に類似する構造に対応する)。構造 (23a, b) が示すように、主語 TOP 要素と DO TOP 要素が共起する用例においても、TOP 要素の相対語順が問われないと予測される。この予測は、(22) によって例証される。6)

(21) a. Ao Pedro, esse barco, os pais não ofereceram. (Duarte 1987: 3b)(12e)

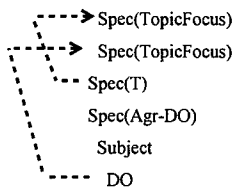
b. Essa história, aos meus colegas, ainda não contei. (Duarte 1989: 35a)

'I did not yet mention that story to my colleagues.'

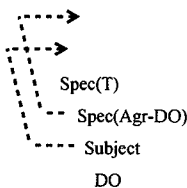
(22) a. O João, esse livro, comprou em Paris. (Barbosa p.c. (September 27, 2011)

b. Esse livro, o João, comprou em Paris. (Barbosa p.c. (September 27, 2011) 'John bought that book in Paris.'

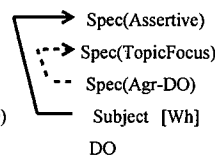
(23) a. → ok



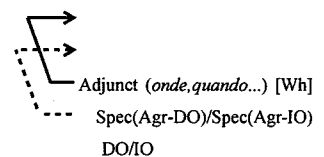
(23) b. → ok



(23) c. → *



(23) d. → ok



α グループでも、主語 Wh 要素と DO TOP 要素が共起する (17b, d) は不適格と予測される。それは、DO TOP 要素の移動経路とその生成位置が始発点となる主語 Wh 要素の移動経路が部分的重複関係を形成しないためである (23c)。(18a-c) の適格性は、付加語 Wh 要素の生成位置 (始発点) が Spec(Agr-IO) よりも上位 (例えば PhiP に付加した位置) であると想定することにより説明される (23d)。7)

3. 結び

Benincà & Poletto (2004) が挙げるイタリア語の Contrastive Focus (CF) 用例に検討を加える (Benincà & Poletto (2004) では、(24) の構造に関する厳密な分析は提供されていない)。本稿の構造 (10a) 中のゼロ範疇 (Wh) の代わりに F(ocus) の投射を想定する。DO (*questo*) のような要素は TOP 要素を構成し、TopicFocus の上位 Spec へ移動する (DO (*questo*) に対応する再述接語が生起しない点に留意されたい)。主語要素 (*Mario*) は TopicFocus の下位 Spec に生成される。CF 要素 (*a Maria*) は Spec(F) へ移動して、FP の ϕ 素性を照合する。CF 要素がさらに Spec(Assertive) へ移動することにより、AssertiveP が活性化される (AssertiveP が FP の Tense 素性を照合するため、定動詞は Phi にとどまる)。つまり、 α グループの (2b) あるいは (16b) と同様に、(24) は適格と予測されることになる。

(24) (Benincà & Poletto 2004: fn.10, (i); (ii))

a. [AssertiveP [A MARIA]_i [TopicFocusP questo [F ti [PhiP *pro* devi dire]]]]. 'You have to say this TO MARIA.'

b?[AssertiveP [A MARIA]_i [TopicFocusP questo [TopicFocusP Mario [F ti [PhiP (*pro*) deve dire]]]].

'Mario has to say this TO MARIA.'

(25) a. A GIORGIO, questo libro, devi dare. 'You must give this book TO GIORGIO.' (Benincà & Poletto 2004: 26)

b. GIORGIO, di questo, ha parlato. (ibid.: 31a) 'GIORGIO spoke about this.'

c. QUESTO LIBRO, a Giorgio, devi dare.

d.*DI QUESTO, Giorgio, ha parlato.

e.*GIORGIO, per questo, ha parlato. 'GIORGIO spoke for this reason.' (Benincà & Poletto 2004: 31b)

f. PER QUESTO, Giorgio, ha parlato.

(25b)における項要素 TOP PP (*di questo*) の生成位置は主語のそれよりも下位に指定されるため、CF要素と TOP 要素移動経路が部分的重複関係を形成する。CF要素と TOP 要素の関係が逆転した (25c, d) はそれぞれ適格、不適格と適格と予測される ((25c, d) に対する予測は更なる調査が必要)。付加語 (*per questo*) が生起する (25e) の非文性は、当該付加語が Spec(T) よりも上位 (例えば PhiP に付加した位置) に生成される想定することにより説明される。CF要素と TOP 要素の移動経路が部分的な重複関係を形成しないため、(25e) は不適格と予測されることになる。⁸⁾

註

*) 本稿は、日本ロマンス語学会第49回大会 (神戸市外国語大学 2011年6月5日) での口頭発表に基づく。

1) 二重と破線の下線は、それぞれ CLLD 要素と TOP 要素を表す。TOP 要素は対応する再述接語を随伴しない。

(1e) と (2b) において [X/Y] と判断される話者グループをそれぞれ α グループと β グループと呼ぶ (Barbosa は α グループに属す)。この話者グループの類別と後述する (9) のそれとの関係は更に調査する必要がある。

2) 本稿でも (4b-d) が想定される。(4d) において D-Linked Wh 要素の Spec(Assertive) への移動は、AssertiveP に付与される素性 [+Assertive] の照合に起因する。IP は T と定動詞が生成される Phi に分割される。

3) 仮に、本稿では以下のように考える。主語倒置に関して、直接疑問文と間接疑問文は類似する挙動を示す。主語倒置が適用されない (6c) のタイプでは、活性化される AssertiveP が間接疑問文を構成し、*que* 以外の Wh 要素が D-Linked Wh 要素として振る舞い AssertiveP に付与される素性を照合するために Spec(Assertive) へ移動する。Wh 要素 (*que*) は AssertiveP に付与される素性 [+Assertive] を照合できない。主語倒置が適用される (6d) と (7d) のタイプでは、定動詞と Wh 要素のそれぞれはゼロ範疇 (Wh) と Spec(Wh) にある。Phi と T の投射は常に生成される。TopicFocus と Wh の投射生成は、TOP 要素と Wh 要素の生起に連動する。Assertive の投射生成もまた、素性 [+Assertive] を照合する要素の生起に連動する。

4) 複数の要素がゼロ範疇の尖端部に生起する場合、下位 Spec は本来の Spec 位置を指し、上位 Spec は最大範疇 XP に付加した位置を指す。

5) Kato & Raposo (1996: p.268) によれば、ブラジルポルトガル語としての (14a) は不適格と判断される。

6) TOP 要素同士の移動形式は、Richards (2002: pp.37-103) のたくし込み (Tuck-In) に呼応する。Wh 要素が一時停止する Spec(Wh) の位置は移動経路に関しては無視される (この Spec(Wh) が作用域 (scope) 等の意味解釈に関与するか否かは、稿を改めて検討する必要がある)。

- 7) 本稿の論法は、 β グループでの (18) を適格と予測する。 α グループの (15c) の適格性は、心理動詞の経験者の生成位置 (始発点) が Spec(Agr-DO) と主語の生成位置 (Spec(v)) の間にあることを示す (Spec(Agr-DO) が DO Wh 要素の始発点となる)。DO Wh 要素の始発点としてその生成位置が指定される β グループの (15c) は、不適格と予測される (互いの移動経路が部分的重複関係にない) (更なる調査が必要)。
- 8) (25f) は適格と予測される。当該用例が非文と判断される場合、付加語 CF 要素の Spec(Assertive) への移動を排除する必要がある。

参考文献

- Ambar, Manuela (2003) "Wh-asymmetries," *Asymmetry in Grammar, Volume 1: Syntax and Semantics*, ed. by Anna Maria Di Sciulo, 209-249, John Benjamins, Amsterdam.
- Ambar, Manuela (2008) "On Some Special Adverbs, Word Order and CP: Variation vs. Micro-Variation," *Canadian Journal of Linguistics* 53 (2-3), 143-179.
- Ambar, Manuela and Veloso, Rita (2001) "On the Nature of Wh-Phrases-Word Order and Wh-in-Situ; Evidence from Portuguese, French, Hungarian and Tetum," *Romance Languages and Linguistic Theory 1999, Selected Papers from 'Going Romance' 1999*, ed. by Yves D'Hulst, Johan Rooryck, and Jan Schroten, 1-37, John Benjamins, Amsterdam.
- Barbosa, Pilar (2006a) "Minimalidade e predicação," *XXI Encontro Nacional da Associação Portuguesa de Linguística, Textos Seleccionados*, ed. by Fátima Oliveira and Joaquim Barbosa, 183-201, Edições Colibri, Lisboa.
- Barbosa, Pilar (2006b) "Ainda a questão dos sujeitos pré-verbais em PE: uma resposta a Costa (2001)," *DELTA* 22 (2), 345-402.
- Benincà, Paola and Poletto, Cecilia (2004) "Topic, Focus and V2: Defining the CP Sublayers," *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, ed. by Luigi Rizzi, 52-75, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale, A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Costa, João (2001) "Spec-IP ou deslocado? Prós e contras das duas análises dos sujeitos pré-verbais," *DELTA* 17 (2), 283-303.
- Duarte, Inês (1987) "A construção de topicalização no português europeu: alguns argumentos a favor de uma teoria de Princípios e Parâmetros," *Actas do III Encontro da Associação Portuguesa de Linguística*, 157-166.
- Duarte, Inês (1989) "La topicalisation en portugais européen," *Revue des Langues Romanes* 93/2, 275-304.
- Duarte, Inês (1996) "A topicalização em português europeu: uma análise comparativa," *Congresso Internacional sobre o Português, vol.1*, ed. by Inês Duarte and Isabel Leiria, 327-360, Edições Colibri, Lisboa.
- Kato, Mary Aizawa and Raposo, Eduardo (1996) "European and Brazilian Portuguese Word Order: Questions, Focus and Topic Constructions," *Aspects of Romance Linguistics. Selected Papers from the Linguistic Symposium on Romance Languages XXIV, March 10-13, 1994*, ed. by Claudia Parodi, Carlos Quicoli, Mario Saltarelli, and María Luisa Zubizarreta, 267-277, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Richards, Norvin (2001) *Movement in Language: Interactions and Architectures*, Oxford University Press, Oxford.